

R E Xプログラム帰国教員としての国際交流の取り組み

長門市立仙崎中学校

教諭 藤井一憲

はじめに

R E Xプログラムの派遣から帰国して2年が過ぎようとしている。派遣中の2年間も含めてこの4年間、さまざまな形で国際交流事業に取り組んできた。山口市に在籍した昨年度までの取り組みと仙崎中学校での今年度の取り組みをまとめ、これからの展望について考えたい。

派遣中の取り組み

R E Xプログラムとは文部科学省の教員派遣プログラムで正式名称を外国教育施設日本語指導教員派遣事業という。私はこのプログラムで約2年間オーストラリアのニューカッスル市の高校でオーストラリア人の生徒に日本語を教えてきた。

オーストラリアは日本語教育が盛んだとよく言われる。Primary Schoolで日本語を教えている学校も多いし、High Schoolでは日本語の講座を開講していない学校のほうが少ないくらいの状況である。これは、国際交流基金の教材提供や研修プログラムなどのバックアップによるところも大きいであろう。

しかし、Newcastle市の状況を見る限り、本当の意味で日本語教育が盛んかどうかという疑問も残る。私の勤務した学校では、Languageのスタッフがフランス語と日本語を担当したり、ドイツ語の先生が日本語も教えるというケースが一般的で、言葉を教えるというより文化を紹介するという授業内容が多いのが現実である。

そういった環境の中で、生徒たちのモチベーションを高めて日本語教育をすすめていくために、様々な試行錯誤を繰り返した。その中で最も有効だったのは、各ユニットのゴールとして実際に日本語を使ってコミュニケーションする場面を設けるという方法であった。

1. 自己紹介VTR

自分の名前や年齢、「～が大好き」の表現が使えるようになった Year7 の初級者を対象に、まとめとして一人ずつVTRの前で自己紹介をさせた。録画するということで原稿作りにもいつになく真剣に取り組むことができたし、中には家庭で練習してきた生徒などもおり、まとめとしてはとても有効な方法であった。

録画したVTRは全体に見せることでお互いのできを評価できたし、次回への意識付けにもなった。またこのVTRは、カナダ派遣の仲間とも交換したり、日本の生徒の自己紹介ビデオと交換したりという活動に発展することもできた。送ってもらったビデオは復習教材としても活用できとても有効な方法だったと思う。

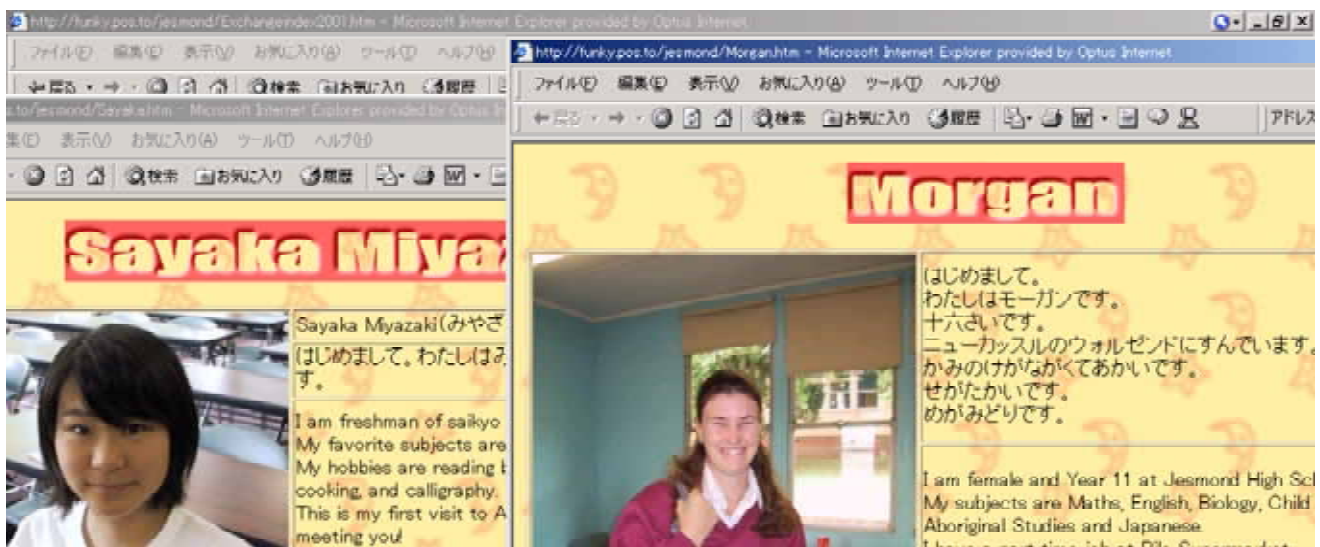


自己紹介ビデオの一場面

2. 学校紹介、街の紹介（インターネット上で）

Year11 の初級者に「～に・・・があります」などの表現を学習した後で、学校や街の紹介文を書かせた。できあがった紹介文はデジタルカメラで撮影した写真とともにインターネット上（プライバシーへの配慮でパスワード保護をかけた）で日本の生徒たちに公開した。実際に自分たちの書いた文章に日本の生徒たちから反応がかえってくるということでいつも以上に熱心な取り組みが見られた。

日本の生徒からも山口市や自分たちの学校を紹介する文章（簡単な日本語で書かれている）を送ってもらい教材として活用することもできた。



3. インタビュータスク



日本人学生とのインタビュータスク

日本人留学生や国際交流団で来ている日本の学生へのインタビュータスクもたいへん有意義な活動だった。同年代の生徒同士の場合、聞いてみたいというモチベーションが我々に対する時以上にあがってくるので、その機会をとらえて新しい表現を入れていけばかなりの定着が見込まれる。

またそういった日本人学生に折り紙や剣玉などの特技を披露してもらえるとちょっとした文化紹介にもなりまさに一石二鳥である。

4. イクスカーション

Year12 の生徒たちを対象に道案内や買い物の実践をシドニーの日本人居住区で行った。シドニーには1万人近い日本人が生活しており、食材等もほとんどのものが手に入る。また日本人が経営するレストランや書店なども多くある。そういった場所でまさに日本語を使わなければならない状況を作り上げ、本当の意味でのコミュニカティブな言語使用場面を体験させることができた。



日本食レストランのレジカウンターにて

このイクスカーションにも近くの学校の日本人留学生を招待した。インタビュータスクをはじめ、その他の活動の補助の役割を果たしてくれた。

5 国際交流事業

多くの日本人が日本語を教えているオーストラリアで、我々 REX 派遣教員が求められていることはなんだろうか。日本語指導だけなら、オーストラリア人と結婚して永住している人、オーストラリアで日本語教師の資格をとって滞在している人など、我々以上に深い知識や高い指導力を持って日本語を指導されている方も多いただろう。

そんな中で、我々 REX 教員にしかできないことは日本の学校や地方自治体との交流ではないだろうか。これまでも述べたように、日本語を学びたいと考える生徒たちは、ほとんど日本の同年代の生徒たちと話をしてみたいという希望を持っているし、実際に交流してみてもその後の学習意欲も格段にあがってきている。そういった交流を柱に、実際に日本語を使う環境を現地の生徒に提供し、さらには日本の生徒たちに現地の生徒と英語や日本語で交流するチャンスを作ることこそ我々に科せられた責務のように思う。

そんな思いから派遣期間を通じて山口市の生徒たちとの交流に力を入れてきた。特に山口市国際交流室とは電子メールや電話で頻繁に連絡を取り合い2001年の8月には山口市の中高生のオーストラリア訪問を実現させた。

先に述べたインタビュータスクや日本語でのオーストラリア紹介など生きた日本語を話す機会を得た生徒たちは嬉々として活動に取り組んでいた。インターネットやビデオを使った活動を経験した生徒たちは、そこで学習した日本語の表現を実際の場面で使うという経験を経て、さらに学習意欲が高まったように思う。

日本の生徒たちも日本の文化を英語で紹介する場面があり、同年代の生徒同士の触れあいはその後の英語学習への意欲づけにもなり、いまだに電子メール交換をしている生徒もいると聞いている。



オーストラリア風の昼食を体験



意気投合してメール交換

帰国 1 年目の取り組み

平成 1 4 年 3 月に帰国した私は、そのまま原籍校であった山口市の鴻南中学校に復職した。この年に一番力を入れて取り組んだのは、山口市の国際交流室の事業とリンクした、山口市の中高生と R E X 派遣中の勤務校であった Callaghan College の生徒たちとの交流事業である。この事業は Callaghan College 在職中から続けているもので、初年度である 2 0 0 1 年度は、山口市の海外都市ジュニアホームステイ訪問団が Callaghan College を 1 日訪問するという形で行った。その訪問が予想以上に好評で、今年度は Callaghan College での滞在期間を 4 日間に延長することができた。

ある程度の日程の打ち合わせや事前交流の段取りは 3 月の帰国前までに終えていたので、帰国後は電話や電子メールでの連絡だけで計画を詰めていくことができた。

事前交流としては、3 月の時点で Callaghan College の日本語クラスの生徒のビデオメッセージを録画しておいたものを利用して、それに対する返信メッセージを送ったり、山口市の紹介ビデオを作成したりという活動を行った。

1 . オーストラリア訪問

8 月の訪問では、前年度同様オーストラリア人の生徒たちによるインタビュータスクやオーストラリア紹介に加えて、美術専攻の生徒たちによるアボリジナルアートの講習や一般授業への体験参加なども実現し、より生の高校生活に近いものを日本の生徒たちに体験させることができた。

また 3 日間にわたって同年代の生徒の家にステイし生活した体験は、日本の生徒たちにとってはとても大きな体験となったようで、その後の英語学習の大きな動機づけになったようだ。事実、この時同行した中学生 8 名のうち 2 名までがこの時の体験をスピーチにまとめ、地区代表として県のスピーチコンテストに出場した。



日本語の授業に参加



4 日間で意気投合

2. オーストラリアからの訪問

12月には、8月の訪問に応える形で Callaghan College の生徒たちが山口市を訪問した。こちらの日程の調整も電子メールと電話で行った。はじめてということもあって、細かい詰めがうまくいかない部分もあったが、双方の熱意で実現にこぎ着けた。

ホームステイの受け入れは、8月に訪問した中高生が中心となって行った。5月からいっしょに活動してきたメンバーということもあって、自分たちでボーリング大会やカラオケ大会を企画するなど、たいへん意欲的に活動し有意義な交流ができたようだ。

また、鴻南中学校への訪問も、様々な障害があったものの、学校長の理解と英語科スタッフの協力でなんとか実現させることができた。選択英語の2年生の生徒で学校紹介、おりがみなどの文化紹介、全校集会でのクイズ大会などを企画し、生きた英語を使うよいチャンスとなった。



選択英語2年生による学校紹介



折り紙の紹介

今年度の取り組み

山口市から地元長門市の仙崎中学校へ転勤した今年度は、ビデオやインターネットを通じての国際交流に加えて、DVDやビデオなどの教材作成にも力を入れて取り組んでいる。交流相手も私の勤務校であったオーストラリアの学校に加えて、山口県からアメリカ合衆国に派遣された岡本先生の勤務されている学校との交流も行うことができた。

仙崎中学校では英語の選択授業を3年生2講座、2年生1講座開講し、生徒の興味関心に応じたカリキュラム作りをしている。3年生の2講座は「読む・書く」の活動を中心としたAコースと「聞く・話す」の活動を中心としたBコースに分け、2年生の講座については「聞く・話す」に重点を置きながらも併せて「読む・書く」の活動も行っている。今年度は特に3年生の選択Bコースの生徒が中心となってビデオ作成などに取り組んだ。

1. リスニングトレーニング用DVD

派遣中に作成した自己紹介ビデオや今年度オーストラリアから送られてきたものの中から、出来のよいものを中心にリスニングトレーニング用に編集して選択授業の授業開きの段階で使用した。

オーストラリアの学校からのビデオでは、彼らが学習した日本語を使ったスピーチに加えて、母国語での意味を確認するために英語で同じ内容を言わせている。この英語バージョンは彼らにとってはいわば確認的なものなので、話すスピードや音声の明瞭さが日本人の英語学習者向けに作られた教材と違って限りなく日常会話のものに近い。また訛りやアメリカ英語ではあまり聞かない表現なども含まれている。そういった生きた英語を聞き取ることは、英語を得意としている生徒たちにとってはおもしろい練習になる。

DVDという媒体を選んだのは、ビデオと違って巻き戻しや早送りをしないで再生したい部分を何度でも再生できるという特性があるからである。編集の段階で難易度の低いものから高いものへと並べて編集してはいるが、この教材の特性上同じものを何度も聞かせたり、場合によっては一気に難易度の高いものを瞬時に再生したいという場面が考えられる。そのためにはDVDを使う方がビデオテープを使うよりもよりはるかに効率がよい。

今回使用したのはオーストラリアの生徒たちの自己紹介ビデオがもとになっているのでどうしても内容的には似たような内容になってくる。そこでマンネリ化した活動にならないために、生徒の活動を段階を追って発展させる工夫をした。最初の段階は聞き取った内容を空欄をうめる形式で書かせ、次の段階ではヒントなしで書き取らせる活動(ディクテーション)に発展させたり、語尾の聞き取りにくいスピーチを聞かせて消えてい

る音を想像して書かせるなどのバリエーションも考えた。

生徒たちの反応は大変好評で、リスニングとディクテーションだけで1時間の授業を組み立てたが、最後まで集中力を切らすことなく、熱心に活動した。

また、自分たちと同じ年頃のオーストラリアの生徒の様子を見ることで異文化理解もでき、ひいては人権学習にまで発展させることもできた。次の時間に予定していた自己紹介の表現活動の意欲づけにもなり、それぞれの自己紹介をを考える上でもよい見本になったようだった。



オーストラリアの中学生の自己紹介を視聴する

2. 自己紹介VTR

リスニングトレーニングのDVDを使った活動のあとに、それぞれの生徒の自己紹介VTRを作成した。オーストラリアの生徒に見せるということもあって、より意欲的に取り組むことができた。

内容的にはオーストラリアから送ってもらう場合と逆に学習した英語を使ってのスピーチに加えて確認の意味で日本で同じ内容を言わせた。先方に送る前に編集して日本語、英語の順にかえることで、あちらでもリスニングトレーニングのビデオとしての活用ができる。DVDでの編集については日本とオーストラリアでは規格が違うためできなかったのが残念であった。

日本の生徒たちの日本語もはっきりゆっくり話すものから、早口で話すものといろいろなバリエーションができ、おもしろい日本語聞き取り教材ができたと思う。



趣味のジグソーパズルについて

「好きな食べ物はナタデココです。」

3. 学校紹介VTR

2学期には文化祭への出品も兼ねて学校紹介のVTRを作成した。オーストラリアの学校生活についてのホームページを閲覧したあとで、あちらの学校と日本の学校で違う点を考えさせ、そこを中心にビデオで紹介することにした。

生徒たちが選んだのは「校門から玄関（特に靴を脱いで室内に入るという点）」、「職員室」「武道場」「和式便所」などであった。クイズ形式のものやコミカルなものなど中学生らしい楽しい内容のビデオに仕上がった。



校長先生も出演

音楽室の紹介で校歌を熱唱

4. インターネットのホームページ作成

3学期にはこれまでの活動のまとめとして、自己紹介や学校紹介のホームページを作成する活動に取り組んでいる。「話す」活動から「書く」活動への発展という意味でもよいまとめになると思う。技術科の学習でホームページの作り方については学習中なので総合的な学習という見地からも有意義な活動になると思う。

反省と今後の展望

これまで実践してきたことをふりかえると、すべて外国語教師としての視点から始まった活動が中心であったように思う。オーストラリアの学校で生徒たちに日本語を使わせる場面をよりリアルなものにしたいという思いから、国際交流という形に発展してきたという側面が強い。

日本の学校でも同様に英語を使う場面をリアルなものにするために様々な活動を仕組んでいるが、日本語話者（日本人）が日本語話者（日本人）に教えるという状況の中でどうしても英語を使う場面がリアルにならないという問題がある。そこで今後の課題としては英語話者（ALTなど）のさらなる活用ということがあげられる。

現在もできるだけ選択の授業には参加してもらい、「20分間英語トライアル（ALTを囲んで20分間英語だけで話す）」などの活動も行っているが、まだまだ生徒たちが積極的に話すという段階までには至っていない。来年度はALTに日本文化を紹介したり、日本語を教えるなどの活動ができればより積極的な取り組みができるのではないかと考えている。

また、同年代の生徒同士の交流が一番効果があがることも昨年度までの取り組みを見ても明らかである。山口で行っていたような中学生の派遣プログラムが、長門大津地区でも実現できれば英語学習への意欲もさらにあがってくると思う。米米フォーラムが成功裏に終わり国際交流への関心の高いこの時期に、ぜひ中学生を海外に派遣できるような環境作りにも取り組んでいきたい。

外国語教師としての視点とは別の視点からの国際理解教育への取り組みも今後の課題として考えられる。学校全体のカリキュラムとのバランスがあるので来年度すぐに実現できるかどうかはわからないが、総合的な学習の時間の中での異文化理解・国際理解も企画してみたい。JICAの講師派遣プログラムや山口大学の留学生センターへの訪問などを軸にした総合的な学習を近い将来実現させたいと考えている。